

『国語科を中心としたコミュニケーション能力の育成に関する授業実践』

—小学校2年生を対象として—

教育実践高度化専攻

小学校教員養成特別コース

M073461 弓場 祥寛

1. 研究の背景

コミュニケーションといわれて久しいが、現在、社会や学校で問題とされる様々な原因の多くは、相手との意思疎通がうまくできないといったコミュニケーション能力の低下がその根底にあるとされる。このコミュニケーションとは、広義の解釈をもってなされ、問題点を焦点化することは易くはない。しかし、学校教育という性質のもと、このコミュニケーションを考えるならば、国語科が近い教科であり、児童のコミュニケーション能力育成に深く関わるものであると考える。

2. 研究の目的

本研究は、子ども達の豊かなコミュニケーション能力を育むための手立てについて考察するものである。その際、特に小学校2年生の国語科における「書くこと」を主体とした取り組みに焦点を当てたい。

3. 研究の方法

研究の方法は、本稿の章立てと照らし合わせて説明する。

〈研究報告書の章立て〉

はじめに

第1章 コミュニケーション能力について

1-コミュニケーション能力とは

2-国語科におけるコミュニケーション能力について

第2章 コミュニケーションに関わる各教科の目標

1-国語科での目標

2-他教科での目標

第3章 今田小2年生を対象とした授業実践を通して

1-学習指導案作成にあたって

2-授業実践「おもいでが いっぱい」指導案

3-授業の評価と課題

第4章 指導案の改善

おわりに

第1章では、コミュニケーションについて、その定義や成立過程、そして国語科を専門とする研究者の考え等を俯瞰する。第1節では、一般社会におけるコミュニケーションの定義やその成立過程、家庭や学校でコミュニケーションが引き起こす問題等について概説する。第2節では、国語科のコミュニケーションに焦点を当て、国語科の研究者が示す国語科に必要とされるコミュニケーションのなどについてまとめる。

第2章では、本研究で主軸となる国語科や、合科として扱った生活科など、学習指導要領で示されている目標をコミュニケーションの視点から考察をする。

第3章では、第1章・第2章を踏まえ、筆者が行った実習や授業実践「思い出が いっぱい」について、学習指導案を中心とした資料を提示する。

第4章では、第3章の振り返りをもとに、新たな学習指導案の作成を行う。

4. 研究の成果

本研究で要となるのは、第4章で提示している新たな国語科学習指導案「思い出が いっぱい」の改善である。実地研究Ⅱにおいて筆者が授業実践で行った学習指導案から構想し直した点

についてその概略を項目ごとに以下に述べる。

【単元目標】

指導案を構想するにあたって小学校学習指導要領にある各学年のコミュニケーションに関する目標を改めて見つめ直すことで、国語科がもつ科目の特色をより強めると共に、授業内容の密度の精緻化を図った。これにより、本授業の単元目標は「書くこと」に軸に置きつつも、その他の領域からもバランスを考慮して織り込んでいった。

【児童観】

普通の授業時における発表や話し合い等の児童のコミュニケーション能力の現状を多面的に明らかにすることで、より児童の現状を考慮した授業構想を行った。また、前単元の学習内容をより詳しく述べ、当時の児童の理解度を習熟度別に整理することにより、個々の児童にあった指導を考えるに至った。

【評価】

評価を評価規準と評価基準の双方で具体的に示すことにより、児童の実態に則した対応や支援などについて具体性をもたせた。また同時に、評価項目をより細かく具体的に示すことにより、児童の理解度を把握しやすくした。

【学習内容】

本単元の軸となる「書くこと」の学習の効率化をより図るために、「文章を書くための5つのポイント」を学習指導要領により準拠したものになるように設定した。それにより、低学年の作文で必要となる事柄をより具体的に織り込もうと考えた。また聞く場合においても「文章を書くための5つのポイント」を意識させて聞かせることで「話すこと」と「聞くこと」に一貫性をもたせるよう努めた。以下がその「文章を書くための5つのポイント」の変更である。

- ・自分の言葉で書いている。
- ・自分しか書けないことを書いている。
- ・自分の思いや考えたことが入っている。
- ・「 」や 、 。 を正しく使っている。

- ・主語、述語に気をつけている。



- ・順序を整理する。
- ・「はじめ」「中」「おわり」を考える。
- ・主語・述語・(修飾語)を正しく使う。
- ・句読点やかぎ(「 」)を正しく使う。
- ・感じたことや思ったことを入れる。

加えて、文章を正しく構成する手法として、KJ法を取り入れた。これにより、より文章の構造を分かりやすく理解させるよう図った。

【指導方法】

一つ一つの指導については、単元目標と照合させる必要があった。また、本授業の学習の定着をより促すために、児童の感想を板書にまとめたり、振り返りの時間を新たに設けたりした。これにより、他の児童の考えがより整理されて共有でき、他者の立場で考え客観的な立場に立たせると共に、より学習が定着するよう図った。

【支援内容】

一つ一つの授業内容、単元目標と児童の実態を照合する必要があった。また、「文章を書くための5つのポイント」に常に焦点を当てることにより、児童の考え方に一貫性をもたせる指導を構想した。

5. 今後の課題

本研究第4章で示した学習指導案は執筆中の現在、まだ構想段階のもので実際に児童に向けてのこれを行っていない。以後は、実際にこの実践を試み、再度内容の精緻化を図っていきたい。また、本研究は「書くこと」を通じたコミュニケーション能力の育成を試みたものであったが、他の領域など広い視野のもとで考察を深めていきたい。

主任指導教員 前芝 武史